

主人公は僕だった

2007(平成19)年2月27日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)



監督=マーク・フォスター/脚本=ザック・ヘルム/出演=ウィル・フェレル/エマ・トンプソン/マギー・ギレンホール/ダスティン・ホフマン/クイーン・ラティファ(ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2006年アメリカ映画/112分)

……ある日、ある男の人生が、ある女流作家の書く小説のとおりに進み始めた……？ そんな面白い脚本を元に完成させたのがこの映画。小説には、必ず終わりがあるが、この作家のエンディングでは主人公は必ず死亡。こりゃ、ヤバい。何とかエンディングを変更させなければ……？ こんな映画って、悲劇それとも喜劇……？ それはあなたの解釈次第だが……？



やっぱり若手脚本家は、頭が柔軟……

「自分にしか聞こえない声につきまといわれる男」というアイデアを思いついたのは、2001年当時26歳だった脚本家のザック・ヘルム。1975年生まれの彼は、今でもまだ32歳だが、この映画ではじめて長編映画の脚本を書き、ナショナル・ボード・オブ・レビューの脚本賞を受賞し、一躍新進脚本家として注目されることになった。そして驚くべきことに、彼は次に、ダスティン・ホフマンやナタリー・ポートマンが出演する『MAGORIUM'S WONDER EMPORIUM』(07年)で監督デビューを果たしたとのこと。

このように次々と才能ある若手が登場するところが、ハリウッドのすごいところ。この映画は、頭の柔軟な若手脚本家でなければ到底生まれなかったもの。そんな視点で、あなたの頭もしっかりと柔軟に……。



なぜハロルドが主人公に……？

彼にしか聞こえない声が聞こえてくる主人公は、国税庁の会計検査官のハロルド

ド・クリック（ウィル・フェレル）。なぜハロルドの職業を会計検査官にしたのかというと、それは数字に強く、何ゴトも数字にもとづいて生活しているヘンな奴という主人公のイメージを強調するため……？ そうだとすると、国税庁の会計検査官の方々には、ごめんなさいとひと言断っておかなければ……？

今日も自宅で1人、決まった時間に決まった回数だけ歯磨きをしていたハロルドの耳に突然聞こえてきたのは、ハロルドの行動をナレーション風に語る女性の声。もちろん、周りには誰もいない。そして、ハロルドが行動を止めるとその声も止まる。しかし、ハロルドが次の行動を起こすと、何とも文学的な表現でナレーションが……？

右手にはめた腕時計だけを唯一の友として、すべて数字どおり、時間どおりの行動をしてきたハロルドの生活は、そんな水曜日の朝から激変することに……。

語りは小説風、するとエンディングは……？

ハロルドにとって困るのは、例の声が聞こえてくるについて何の法則性もないこと。したがって、ハロルドとしては対応の仕方がないわけだが、その一方的な声はまるでハロルドの行動をすぐ傍で監視しているかのように正確だから、やりきれない……。そして何回も聞いているうちに、それはハロルドを主人公にした小説のように思えてきた。もしそうだとすると、小説にはエンディングがあるからそこでおしまい。すると、その小説はどんなハッピーエンド……？

そんなことを考えている時に聞こえてきたのは、「このささいな行為が死を招こうとは、彼は知るよしもなかった……」というナレーション……？ 何だった？ 主人公が死ぬ……？ しかし、その主人公はこの俺……。すると俺は……？

若々しく知的なダスティン・ホフマンにビックリ……

『卒業』（67年）で大学を卒業したばかりの若者を演じて注目されたダスティン・ホフマンは、1937年生まれだからもうすぐ70歳。しかしこの映画で、ハロルドが訪れる大学教授ジュールズ・ヒルバートを演ずるダスティン・ホフマンは、若々しく知的でステキ……。もっとも、ハロルドを演ずる大男のウィル・フェレ

ルと並ぶと、まるで大人と子供だが……？

ヒルバートはワケのわからない相談を持ちかけてくるハロルドに対して、当初「私の専門は文学理論で、精神分析ではない」と突き放していたが、ハロルドの耳に聞こえてくるフレーズがえらく文学的なことに気づくと、たちまちハロルドの病状に興味を……。そして文学に詳しい大学教授らしく、「悲劇は死で、喜劇は結婚で終わる」とカッコ良く語り、ハロルドに「最初は敵対する相手と恋におちる」ことを勧めたが……。

作家はやっぱり特殊な人種……？

今から36年前、三島由紀夫が陸上自衛隊東部方面総監部（市ヶ谷駐屯地）で割腹自殺したのには驚いたが、玉川上水で入水自殺した太宰治や死ぬまで無頼を貫いた壇一雄など、作家には特殊な人種が多い。最近では『愛ルケ』（06年）が映画化されたことに伴って、テレビや新聞紙上に引っ張りだことなった渡辺淳一が、あの年で「エロスとは……？」とヌケヌケと語っている姿を見ると、やはり彼も特殊な人種……？

この映画では、最後の作品から10年間も遠ざかりながら、今最高傑作になるであろう新作を執筆しているのが、女流作家のカレン・アイフル（エマ・トンプソン）。そして実は、彼女もヘンな奴……？ 彼女はどの小説でもエンディングで必ず主人公を殺してしまう悲劇作家だが、今悩んでいるのはその殺し方……。出版社から送り込まれてきた監視役（？）の助手ペニー・エッシャー（クイーン・ラティファ）の下で、数々の奇妙な実験（？）をしながら、やっとカレンの頭にひらめいた主人公の殺し方とは……？

ケーキ屋との恋はマンガ的だが……？

目下のハロルドの敵対する相手は、小さなケーキ屋の女主人であるアナ・パスカル（マギー・ギレンホール）。彼女はハロルドの税務調査のターゲットだが、「税金が防衛費に使われるのは許せないから、その分を払わなかった」と主張する確信犯だから始末が悪い……？ このアナを演ずるマギー・ギレンホールは、『セクレタリー』（02年）で魅力的な演技を見せ、数々の賞を受賞した女優（『シ

ネマルーム3』254頁参照)。したがって、ハロルドが彼女にホレても当然かもしれないが、逆に「フラワー（花束）のかわりにフラワー（小麦粉）」を捧げてきたというハロルドに、アナがなぜ落とされたのか私には疑問。このようにこの恋模様はちょっとマンガ的だが、これはサブストーリーだからまあいいか……？

ハロルドはさっそくアナとの恋の勝利、そして喜劇を勝ち取ったことをヒルバート教授に報告しようとしたが、今ヒルバートの研究室のテレビに映っている女流作家カレンが話す声は、まさにいつもハロルドの耳に聞こえてくるあの声と同じ。カレンはヒルバートの大好きな作家だが、エンディングはいつも主人公の死と決まっていると聞き、驚いたのはハロルド。これは何とかしなければ……？ そのためには、直接カレンに会いに行き、エンディングを変更させるのが1番。そう思いつめたハロルドは、すぐにカレンの家へと急行したが……。

どちらのエンディングが……？

あるところで、ビルの屋上に立つカレンの姿が登場するが、これは見るからに自殺願望のおばさん風……？ しかしこれは、彼女にとっては小説を書くための大切なネタ仕込み。すなわち、飛び降り自殺と同じもしくはそれに類似した体験をしなければ、自信をもって飛び降り自殺のエンディングは書けないというわけだ……。そんな彼女の頭にひらめいたアイデアは〇〇というもので、その出来にカレンは自信満々。

ところが、そんなカレンの目の前に血相を変えて飛び込んできたのがハロルド。まさか自分の小説と同じ名前、同じ職業の人物が現実に存在し、彼女が書いているストーリーどおりに彼の生活が進んでいっているとは……？ これぞ、まさに「OH MY GOD!」しかして、カレンが完成させた小説のエンディングは……？

2007(平成19)年2月28日記